

## 令和5年度一関市観光審議会 会議録

- 1 会議名 令和5年度一関市観光審議会
- 2 開催日時 令和5年7月20日(木) 午前10時から午前11時30分まで
- 3 開催場所 一関保健センター 会議室1
- 4 出席者
  - (1) 委員 佐々木賢治委員(会長)、船山賢治委員(副会長)、伊藤利幸委員、伊藤美枝子委員、坂田真樹子委員、丹野麻琴委員、千葉敏則委員、松本数馬委員
  - ※ 欠席 昆野洋子委員、月居康男委員
  - (2) 事務局 今野薫商工労働部長、渡辺恭弘観光物産課長、小野寺孝良観光物産課課長補佐兼観光係長、佐々木浩二観光物産課課長補佐兼物産係長、永澤恵里観光物産課物産係主査、上野幸子観光物産課観光係主査

### 5 議 事

- (1) 一関市観光振興計画の推進について
- (2) その他

- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 2人(報道機関)
- 8 石川隆明副市長挨拶

改めまして皆様おはようございます。副市長の石川でございます。市長は、本日午後に県内の市長会議があり北上市に移動中でありますので私が代わって、一言ご挨拶を申し上げます。

観光審議会の委員の皆様におかれましては、まずもってご多忙の中、本日はご出席いただきありがとうございます。

また、当市の観光振興につきまして、日頃より、様々ご尽力をいただいておりますことに対しまして、感謝を申し上げます。

今お手元に配られております、一関市観光審議会条例第1条によりますと、この審議会の設置の目的は、観光事業に関する必要な事項を調査及び審議するために、この審議会を置くとなっております。当市の観光政策を練り上げていく上で、皆様のご意見をいただきながら、一歩でも二歩でも前に進めていきたいということでございます。

本日の会議は、令和4年度の当市の観光施策の実施状況をお示ししながら、来年度、令和6年度に向けて皆様方からいただいたご意見をもとに、観光施策

を作り上げていきたいと考えてございます。本日も忌憚のないご意見を頂戴したいと思います。

リーサスという地域経済分析があるのですけれども、5年ぐらい前にそれを見たときに、当市の観光分野における、いわゆる外貨の稼ぎ方と言いますか、それはかなりいい位置を占めていたような記憶があります。ただ、課題として地域内経済循環になかなか結びついていないというような統計資料を見た記憶がございます。本日は、様々ご意見をいただく中で、その辺を意識しながら、ご意見をいただければと思います。

今年は、「4年ぶり」と、冒頭にそういう言葉がつくような様々なイベントがありますが、コロナ禍からのV字回復を狙っていかなければと考えており、観光については、その最先頭でありますので、今後ともよろしくお願い申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 9 議事

### (1) 一関市観光振興計画の推進について

資料に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

会 長 二次交通の補助金について、今の状態が続けば見直しというような説明があったが、この平泉駅から狹鼻溪間については、やはりインバウンドが戻りきらないときには、本当にお客さんが乗っておらず、今年の春ぐらいからインバウンドが戻ってきてきているが、もう少し安定的にインバウンドのお客さんがお越しになるようになれば、活用があるのかと思う。ただ1つ要望だが、岩手県交通の定期バスにげいび溪線があり、これは私たち市民が病院や学校、職場などへ行くための路線である。そのため、土曜日、日曜日、祝日というのと、逆に言うと観光客は増えるが、日常生活の中では乗る人は激減する。

日常の生活に合わせたバスのダイヤになっているので、肝心な土日祝日の場合は、その本数が特にも午前11時から午後1時にはない日もある。なので、この補助金は入っていないのかも知れないが、そういう現状を、やはり交通機関の方にもご理解ご協力いただかないと、観光のまちにしようと思っても、土日祝日はバスがないというのはどうなのかと思う。そのような状況だということを少しご理解賜りたい。

委 員 全体に対して、いくつか質問がある。たくさん事業を実施されて素晴らしいとは思いますが、継続や新規のものだとは思われるが、令和4年

度実施を見て、令和5年度、6年度に廃止、縮小した、大幅に見直したなど今回で終了する事業があったら教えていただきたい。

また、先ほど二次交通の話があったが、課題のところに費用対効果が見合わないというところがある。目標値としてこれぐらいと定めている、どれぐらいだと見合うというところを見据えているのか。それから、ターゲットとして、外国人の方が乗れるような表示や環境になっているのかというところを教えていただきたい。

事務局 1つ目、こちらに挙げている事業で、今のところ廃止、縮小というものはない。継続実施という中で、方向性を変えるのは栗駒山山開き登山ツアーであり、今後は実施せず、多くのお客様がいらっしゃるころなので受入環境の整備に努める。今年は、既に秋のツアーガイドの要請が1,000人を超える予約が入っており、ツアーガイド不足ということがあるので、事業については見直しをする。

それから、もう1つ、二次交通の費用対効果というところで、1人当たりで話をすると、現在、平泉駅から猊鼻溪まで行くと運賃は700円かかる。それから、須川温泉線の一ノ関駅から須川温泉まで行くと、こちらは運賃が1,480円ということになっているが、費用対効果は同等の単価が必要ではないかと考えており、1人当たりの単価としては1,300円ぐらいなので効果としては十分あると思う。平泉駅から猊鼻溪間は、700円に対し1人当たりの単価としては4,000円弱ぐらいかかっているような経費であり、目標値は、やはりその運賃と同額くらいというようなどころでは考えている。

世界遺産平泉・一関を代表する観光地に来ていただくよう事業を実施しているので、来ていただけるお客様、皆さんをターゲットにしている。

バスの表記は日本語で、外国人の方が利用しやすい状況にはなっていない。バス停は、確かに表示などが必要というのがあり、また、そういう意見を各所で聞くので、すぐには難しいのかもしれないが対策は必要だと考えている。

実は令和3年度に、世界遺産平泉・一関DMOに委託し、観光案内サインというガイドラインを作成した。なぜ作成したかというのと、一関DMOの調査で、一関、平泉にいらっしゃる外国人の方に委員となっていただき、こういった内容を書いて教えたほうが良いという話にな

った。バス停だけではないが、そういったご意見を承ったことによって、こういった看板や案内を作ろうということで、今回補助金を新たに制定したという流れがある。ただ、補助金を活用していただけていないという部分があるので、次の展開は、さらなる周知、こういう補助金があると周知するというところで取り組んでいきたいということと、もう一步踏み込んだ取組も必要ではないかというご意見を伺って、考えたところである。

委員 この二次交通について、一ノ関駅と須川温泉間は、岩手県交通に午前と午後運行いただき利用者が0人という日は、ほぼない。

1人でも2人でも乗ってくることはあるが、まだバスいっばいに乗って来るということは、毎年のことだが秋の紅葉期にならないと満車になるということはほとんどない。ただ最近、今年になって目立っていたのは、インバウンドの方々がタクシーで須川高原へ行くことである。帰るときは、バスを利用するという方々が何組か見受けられた。先日は、欧米系の方5人がタクシー2台に分乗してきて、お風呂で1時間ぐらい過ごしバスで帰った。要は、お金のかけ方だと思う。今ちょうど円安などそういった部分もあり、国内で観光する海外の方々は潤沢に予算を持っていると思う。その中で、行きも帰りも両方タクシーとなると、タクシーを待たせておくわけにいかない、帰りはバスでもいいという感覚でいるのかと思う。その方々のほかにもタクシー利用の方々がいた。

そういう観光にかけるお金の格差は、海外の方々と日本人とでは、今はかなり違うのかというところがあるので、逆に言えば、そういうタクシーの利用を促進させるいい機会と思った。

案内の仕方だが、今、観光協会が作成した案内でバスの時刻表に日本語と外国語表記を一緒にしたものがあり、活用させていただいている。海外のお客様がいらしたときに、やはり昔から比べると日本語を全然喋られない方々もずいぶんいらっしゃるので、そういう方々を案内するのに、外国語表記の案内があるとすぐわかっていただける。それをうまく活用して、今後もやっていきたいと思う。

全体の部分になるが、一関市は今インバウンドにどれだけ力を入れているのか。それによって、お金のかけ方も変わり、バス、タクシー、宿、各観光地に円滑にお客様が移動するため、あるいは訪れるため本

当にインバウンドのお客様が欲しいのであれば、そこはきっちりやっ  
ていかないと、そこが少しおろそかに、コロナ禍でできなかったとい  
うのもあるが、もっとお金をかけても良いのではないかと思う。

海外の方々が一ノ関駅に降りたときに、どうしたらいいのだろうと  
思っておられる方もいらっしゃるのではないかと見受けられる。今後、  
検討していけばいいのかと思う。

事務局 インバウンドに対する市の考え方、市長からの指示ではこれからど  
んどん力を入れていきたいという考えを持っている。市長がベトナムに  
今週末から行く予定だが、こちらは外国人労働者を中心とした日本での  
受入環境の整備、これをやっという考え方をしていこうという考え方をしている。インバ  
ウンドについては、台湾の方をやはり力を入れていくという考えを持っ  
ており、そして、市長はできるだけ早く台湾を訪問して様々な旅行事業  
など、そういったものをやっしていきたいと考えている。

5月に、外国人市民等支援本部というのを設置して、一関市に住ん  
でいる方を含めて、外国人の方が暮らしやすい、あるいは仕事しやす  
い、地域で生きやすいという、そういった環境を整えていこうという  
ことで立ち上がったばかりだが、これからやっという考え方  
をしている。労働者や観光客に、どういった環境を整えていけるのか  
ということ調査、あるいは意識改革、市職員も含めた意識改革に取り  
組んでいる。

また情報提供になるが、8月上旬に台湾の企業のトップの方に招聘  
事業を行う予定としており、これは詳しいことはまだ固まっていない  
ので、報道へ情報提供はしていないところではあるがそういったこと  
も今進めている。

委員 JR大船渡線の魅力発信事業、観光活用推進事業に関してだが、  
様々なコンテンツをやっということがひとつ考え方として  
あるのだと思う。しかし、これだとどうしても単発的なイベントにな  
ってしまうのではというのがある。いわば、JR大船渡線というもの  
自体すごく観光という要素であり、地域の足という観点でも絶対的に  
これをしていかなければいけないものと考えている中で、台湾の集集  
線（しゅうしゅうせん）というのがある。これは台中と近い短いロー  
カル線である。短い距離だが、ものすごい集客力がある。昔ながらの  
古い建物があり、それぞれ駅ごとに魅力がある。ローカル線の助成に

関しても、単発のイベントより、それぞれのまちの魅力などその沿線の魅力というものをしっかり打ち出すようなことをしていかないと、やはりかなりの赤字というのは報道でもされていると思うので、魅力発信がすごく大事なのかと思う。

もし、市長が台湾へ行かれることがあれば、集集線（しゅうしゅうせん）に行ってみていただき、ぜひその全体的な魅力発信というところに軸足をシフトしていただけると良いのではないかと考えている。

会 長 次に、食と農の観光PR事業などもあり、課題など見えているようだがこの事業についての意見はいかがか。2ページから4ページの中ほどまでは、各地域におけるイベントへの補助事業などが載っている。これは各地域のイベントを通して一関を発信、そして誘客に努めているというような事業の内容である。

また、今年の一関夏まつりについて、何か取組が決まったものがあれば情報としてPRをお願いしたい。

委 員 今年、第70回を迎える一関夏まつりは、花火を中心に昨年実施できなかった大人の神輿など、そういうものを復活させてコロナ禍前に戻った形での実施を考えている。

さらに今年70年ということで、最終日、6日の夕方6時から、磐井川堤防でいわゆるグランドフィナーレということで花火の打ち上げ実施を予定している。令和元年度頃から、一関市民の新しい踊りというものの作成に取り組んでおり、新型コロナウイルス感染症の影響で中断している。昨年頃からまた加速して進めてやっと今年の春に踊りが完成した。ある程度形づくられたものがあるので、それを現在、各地域の夏まつりでの披露に向けて練習会を開催しているところである。2日目のくるくる踊りパレードでもお披露目し、最終日のグランドフィナーレでは各地域の地元の方々に、各地域の踊りを踊っていただいた後に、またみんなで新しい市民の踊りを一斉に踊るといったような形のイベントを考えている。70周年ということで、花火も今年は昨年以上に盛大に行いたい、例年より3割ほど花火の単価が上がっており、非常に厳しい状況ではある。一関では3名いる花火師に協力していただいて、今年も音と光の競演という形の3部構成で実施をするところである。昨年以上に良いものということで、堤防改修され観覧席もだ

いぶ整備されたので、ぜひ市内だけではなく市外からも来ていただいで近くで見えていただきたい。一関の花火は号数や玉の大きさは小さいが、距離が非常に近いので十分に迫力を感じていただけると思う。そういう面をPRしながら、今準備をしているところである。

委員 一ノ関駅前のイルミネーションについて、参考までに、今年2月に盛岡で開催していたイルミネーションは、まち全体もイルミネーションがされており、一関でも駅前から範囲を広げられたらいいのかと思った。

委員 駅前のイルミネーションについては、12月上旬から1月10日頃の3連休の最終日までの期間ということで実施している。

商工会議所青年部が主管して飾り付けなど行っており、おかげさまで好評いただいているところだが、どうしても予算的な部分もあり、駅前周辺での実施という形になっている。過去には、大町で大掛かりに実施していた時代もあった。その当時は、電力会社に協力いただき工事をしていただいていたが、商店街が経費負担をすることが難しいという問題もあり、そのため大掛かりな実施はなくなり一時衰退した。しかし、平成29年に寝台列車の四季島が一ノ関駅に停まることをきっかけに、お客様が食事のため一ノ関駅で降り、食事をして駅に戻るのが夜の11時くらいということで、イルミネーションの電気が切れているのは寂しいということで復活させたということがあった。

いずれ、青年部でも様々お金を集めることはしているが、市のほうにもご協力をいただいである程度の形にはなってきたのだが、これから広げるというのは、いいことだが予算的な問題もある。

会長 イルミネーションが駅前から繋がればいいかとは思いますが、観光協会としてまだ実際にはなっていない。このイルミネーションが、一関で一番脚光を浴びたのは室根町の津谷川になる。津谷川と駅前のイルミネーションが、例えば、ひとつのコースとして組めるくらい現存すれば、また、大東の方にも1軒あるので観光協会としていち早くそれをキャッチし、許可を得てルートを組み1か所で大きくやっていくのも1つだが、私たちには見本として津谷川があるので、その津谷川とどこか拠点を戦略的に結べるような発信の仕方もあるのかと、今貴重なご意見を頂戴して思った。ぜひ繋げていきたいと思っている。

また、5ページの伊達な広域観光推進というのは、先ほど説明があ

ったとおり仙台市が中心になって、山形、岩手の中尊寺、奥州市まで本当に素晴らしいメンバーや地域が入っている。何の協議会でもそうだが、何かをやろうとして自治体が声をかけると、最初は、みんなそれはいい話だと思える。それが、実際にその協議会が実働していく中で、最初に入ったほうがいいと思って入ったが、実際には、そんなに恩恵が見受けられないということになってくると、協議会から抜けるということになるので少し残念なことだと思う。しかし、この協議会は、そういう状況でも仙台市は本当に一生懸命やっていただいて、本当にありがたい協議会だと思う。また、広域連携に感謝したい。

委員 伊達な広域観光推進協議会とは、盛り上がりが震災で消滅してしまったような感じになっているが、今はどのような活動をしているのか。

事務局 協議会の中心というのが、平成 25 年度くらいから教育旅行の誘致に力を入れているというような形になっており、平成 30 年度からは首都圏や関西に加え、中部地方の旅行代理店のセールス、それから積極的な誘致活動、こういったものを行っている。

新型コロナウイルス感染症の影響で、ここ 2 年 3 年はなかなかそういうものはできなかったが、昨年度、首都圏を中心に旅行代理店や学校関係者の方に、教育旅行誘致ということで協議会の行政のメンバーで代理店など訪問をしながら誘致活動を行っている。

委員 一時期は、仙台、松島から今の南三陸、気仙沼、登米、千厩、一関、平泉というルートの設定までした。会議に入り意見を言ってきたが、一関に関しては、もち食や一関温泉郷のほか我々の知らないようなことまで仙台市のほうでこまめに調べており凄いなと思った。

交通状況を様々協議して話を聞いてくると、かなり一関に期待している面も多いと思った。その後、全然話を聞く機会がないので、どういうふうに進んでいるのかとは思った。

事務局 周遊促進事業ということで、過去には取り組んでいた部分があるのだが、今ここの中で見直しではないが教育旅行に力を入れているような形だった。ご意見があったので、今後、協議会の際にはそういったことなども踏まえて意見交換をしていきたいと思う。

会長 私もほかの一観光事業者というか、観光協会として思ったのだが、先ほど一関としてインバウンドに力を入れているのか、入っていない



のかというような話があった。日本国としての観光事業のあり方、東北のあり方、岩手県のあり方、一関市のあり方、そして、各団体の方向性というのが、やはり同じ方向を向いていないと力が倍になっていかないのかと思った。観光協会に限らせて言わせていただければ、国の方向性、県の方向性、そして、各団体の方向性というのをまとめて会員に周知していくことがやはり必要なのかと思う。そうでないと、力のない一企業が、海外に営業に行くが自分だけでどこへ行こうかとやっている、それではなかなか力にはならない。ただ、団体や地域が目指している営業先、どこからお客様をお呼びするかなど、今力を入れている、例えば、今のように教育旅行などのそういうポイントで調べて、方向性をきちんと示していかなければならないということ、皆さんの話を伺って強く思っていたところである。

委員 駅で観光案内業務をやっており、やはり新型コロナウイルス感染症が少し落ち着いてきたから、外国からのお客様は増えている。会員の中でも、英語を話せる人が少人数だがおり、たまには勉強会をしたりしているが、共通語で英語だけわかればいいのかと思う。しかし、それぞれ国が違くと英語も通じないときがある様子である。中国語を習っている方もいるようだが、あまり中国からのお客様は見えていない。

先ほどの話に戻るような形だが、交通機関について、みちのくあじさい園へ向かうお客様は本当に不便で困っているようだ。行くときは、大体まず定期のバスで行くが、帰りがなかなか思うようにいかないという苦情をいただくことがある。みちのくあじさい園へ、午前中だけでも、1回から2回ほど、電車か新幹線に合わせた時刻で行くというルートがあったらいいのかと思っている。

会長 地方の観光地は、本当に交通が重要となってくる。巖美溪と猊鼻溪を間違っ行って行く方がいる。そうすると、間違っ来たので次のバスや電車で帰っほしいと言うと、平泉や一関行きへは、2時間3時間待ちとなる。1回間違っるととても気の毒で、3時間待ちっほしいとは言えないので後は自分で送るしかない。平泉と巖美溪へは自分たちで送っっていくこともある。それくらい間違っ来たら大変である。先ほど言ったように、朝晩しかバスのダイヤがないので、実際、今おっしまった通りだっと思う。本当に貴重なご意見ありがとうございます。

資料7ページの取組について、課題見直しを図っていくと先ほど説明があったが、これについてその新規の今の取組については、今のところ具体的な見直しということはないということか。

事務局 具体的な取組を、今年度は4市村で考えている。スタンプラリーや、実施している写真コンクールが悪いというわけではないが、これまで継続実施しているポスターに、写真など様々なデジタル化ということも考えている。新たな取組もいいのではないかとということで、今年度、月1回ずつ、次の展開の見直しをしていこうという話し合いをしているところである。

会長 この前一関市観光協会でも、初めて総会に近隣の観光協会会長に案内を申し上げた。交流もないのに、突然の案内なのでなかなか皆さん来ていただけないのだが、気仙沼の会長がいらっしゃったので大変私も嬉しかった。気仙沼の会長もとても喜んでいただき、帰り際に、一関と気仙沼とで共同で事業を一緒にやらないかという課題をいただいた。行政の方で、各自治体と連携をとっているというところを何とかして、私たち民間の方の交流の手助けもしていただければありがたいと思う。

例えば、先ほど市長がベトナムへ行くと言ったとき、その自治体の経済団体が同行するというので、それをひとつの糸口とし、一関市のほうで近隣とのお付き合いの中で行政が行っているときに、1年に1回くらい商工会議所や私達観光協会などに同行させていただき、交流の場を、きっかけを作っていただく。そのようなことはその事業に直接関係はないが、そういう窓口を開いていただくとより一層密になるのかと思う。行政では常にやっているわけだが、それを一般の経済団体にもおろしていただくといい、そんなことを思った。お願いしたい。

事務局 広域連携推進の話から、今お話いただいたが、今の時期は観光、物産、あるいは労働環境もそうだが、とにかくどちらかと言うと、姿勢とすれば、攻め時というか積極的に働きかけを進めるべき時期と捉えているところである。

広域連携は、いわゆる栗登一平と言っているが、栗原、登米、平泉を含めたところで、観光団体や経済団体の方々が一堂に会して、地域の経済あるいは観光物産など様々な点で話をしたいということで考

えているところである。当市の場合、位置的なところがかなり岩手県の端で3県が隣接しているという状況になるから、この位置取りというのをしっかり活かしていきながらやっていかなければならないという考えでいる。今、会長がおっしゃった方向で、今のところは内部検討をし始めているところである。

会長 ありがとうございます。

最後の8ページについて、先ほど大船渡線の事業の話もあったが、改めてこの中で質問や意見があればお願いしたい。

委員 ワークーション推進事業のところをもう少し詳しく教えてほしい。

モニターツアーを実施して、交流人口の拡大に繋がったというのだが、県でもたまにあるが、どうしても何かをやって終わりではないが、なかなかそれをどう活かすかというところである。費用対効果を考えたときに難しいと個人的に考えている。どのような感じで、交流人口や関係人口の拡大に繋がったという評価になったのかというあたりを教えてほしい。

事務局 一関のワークーションは、先ほど申し上げたとおり地域おこし協力隊員に中核人材として活動していただいている。その中で、もちろん観光ワークーションという切り口で、当初取り組んでいただいた。

コロナ禍において、ワークーションという言葉が一気に広がり、全国的にワークーションを実施しているところが多くなったという中で、なかなか観光ワークーションだけで一関のPRというのは難しい状況である。観光ワークーションももちろん実施しているが、課題解決型ワークーションというスタイルで、具体的には副業でワークーションを選択する方、人材と課題を抱えている地元企業とのマッチングなど、こういったものを推進していこうというような形で、昨年度取り組んだ。

その中で、昨年度のモニターツアーは、市内の民間企業にお願いをして、企業の課題を手伝いし、かつ観光を楽しむモニターツアーに取り組んだ。今年度は、もう少しモニターツアーやマッチングを増やしていく形を予定している。今後こういった形が一関に合っているかということを見極めていきたいと考えている。また、費用対効果というところ、そこまではまだ分析はできていなかったというのが正直なところである。

委員 先ほど話のあった地域おこし協力隊について、今度 18 名ほど、市で募集し、様々な地域課題を取り組んでいくということだと思うが、3 年後の任期が終わった後、帰ってしまうということがないように、先ほども人材不足という話が出ている中で、その方たちが事業をされるというのももちろんだと思うが、例えば、採用やここで働くなど、そういった形にうまく繋げられるようにもう少し接点や、そういう事業者の方々とも関わりを持っていただくような形で、ぜひ来ていただいた方には定着していただくようお願いしたいと思う。

委員 2 点ほど、説明させていただく。先般の世界遺産平泉・一関DMO の報告会へ出席ありがとうございました。その際に、先駆的DMO として、全国で 3 団体の中のひとつの団体ということで下呂温泉の観光協会の会長に来ていただいた。その中で話していたこととして、その地域のデータをいかにとっていくかというところ、何かイベントをやったときに、その費用対効果が本当にあったかというのが、すぐわかる仕組みになっているということがある。本当に様々な取組をやっている中ではあるのだが、やはりその部分が、私どもの地域にとっては、足りてない部分であり、なかなかそこができていないと感じる。改めて、宿泊事業者や観光事業者と連動しながら、来られている方のデータみたいな部分をしっかり取り込めるような地域で、個人情報的な部分は不要だが、来られた方の属性やその費用対効果がどれだけあったのかなど、そういうようなことも分かるようなものを構築していかないといけないのかと感じた。ぜひ、検討を私どもも個別にさせていただきたいと考えているところである。

また景観に関して、昨年度、私どもは公民連携デザイン会議というのをさせていただき、巖美溪のほうに様々な方々に来てもらい、様々な場所を見ていただいたが冬場は立ち入りができない状態になっている。来た方が見に行けない。危ないということで行けなくなっている。全体の景観というもの、景観条例というのは確かにあるのだが、乱開発をされないため 45 年前に作られたような条例があり、一定の役割を果たしていると思う。しかし、現在の状況に合っているのか、ビジョンというか、巖美溪として本当に今後どういうふうに周りの景観も含めてやっていくのかというところをやはり考えていかない。逆に、景観条例があることで、民間側からなかなか投資できないという

ような状況があるのかと考えている。改めて、観光まちづくりの観点から、エリアごとのビジョンづくりなどを、目指していくということが必要である。当然、観光振興計画はありながらも当初はないが、もう少し民間と行政の方と連携しながら、5年後はここまでやっていくなど、もう少し具体のところをやっていきたいと考えているので、今年度、そのあたりを私どもとしてはご提案しながら進めさせていただきたいと思う。

委員 一関・平泉バルーンフェスティバルに関して、観光資源の活用と情報発信の充実という中でのこのバルーンフェスティバルの立ち位置が、どれだけの影響が出るかというのが私は少しわからない。費用は確か1,500万円から1,200万円へ、今は1,000万円ぐらいと負担金は年々下がってはいるようだが、この1,000万円というのがどれだけの価値があるのかということ、この場でなくてもいいので示していただければと思う。

例えば、参加しているお店、販売関係の方が潤っているのであればまた別だが、観光に繋がっているかということを見ると、宿泊されたお客様が一関市内を訪れている方が増えているという実績が出ているのであればお話するところではない。しかし、どう良いように見ても、宿泊、少なくとも一関温泉郷協議会の中でバルーンフェスティバルに合わせて泊まりに来ているということはずない。

市内のホテルなど、そういったところまでは把握してはいないが、スタッフの方々はホテルにも泊まるが、ほとんどは車で寝泊まりしているなど、あまりそういった部分での費用対効果が本当にあるのだろうか。お金のかけ方がもう少し様々なところへ振り分けもできるのではないかと思った。今、回答いただけなくて結構だが、どうも予算が突出しているの、そこが本当に観光に役立っているかどうかということだけ、お願いしたい。

会長 ご意見ということで承る。

委員 二次交通の件だが、秋に、げいび溪線の運行が岩手県交通から東磐井交通へ変わる予定なので、先ほどの一般の方の話や、繋がりとして時間が合うのかというのを改めて持ち帰って話をしたいと思った。

委員 二次交通の話だが、具体的に、須川あるいは平泉・げいび溪線の具体的な1日3便の内容や人数など、新型コロナウイルス感染症の影響で参

考にならない部分もあるかもしれないが、数字を出していただくわけにはいかないのか。

事務局 利用者人数については、記載のとおり。

委員 例えば、1日3便のうちの1便の乗車人数あるいは、何月が多いなど、そういう情報はやはり大事だと思う。

事務局 この会議でお示しするということか。

委員 例えば、時間変更したほうが良いのではないか、あるいは増やしたほうが良いのではないかなど、そうでないと意見が出せないと思う。

事務局 平泉・げいび溪線については、1日当たりの使用状況は、全体的な傾向としてはゴールデンウィーク、あとはお盆期間や紅葉の時期にどうしても利用が多い状況である。

また、全体的には土曜日、日曜日、あとはその前後の月曜日、金曜日そのあたりの利用は比較的多い状況なので、それ以外のところは、あまり利用がされていないというようなところである。須川温泉線については、紅葉の時期がやはり多いような状況となっている。

委員 委員に質問してもいいか。

先ほど地域のデータをという話について、それは本当にどこでもそういう話が出ているが、ターゲット層を絞るのにもデータが必要であるという話になる。しかし、一体どうやってデータを取っていくかというところが、どうしても一歩踏み出せてないところがある。先ほど成功しているというか、例を聞いたという話を聞いたので、具体的にどうやってそれを積み上げているのかということをご存知でしたら教えてほしい。

委員 宿泊台帳のデータを共有化しているので、例えば、花火大会をやったとして、その投資効果がすぐわかるという仕組みとなっている。

DMOで地域の宿泊事業者のデータを取りまとめて、空室率などそういうのはすぐわかる仕組みである。

会長 この前、私も参加させていただいたが、本当に参考になった。ここ何年かはどこから来たというのを窓口で集計をしているが、特にインバウンドはどこから来たかということは聞いてその都度、人数を確認している。今言われたように、宿泊や観光施設など、それがはっきりしていて、その地域の事業の時とリンクさせれば事業の効果が出ると思う。

あとは、先ほど副市長が言われた、リーサスは商工会議所職員が全体へ説明していた。それを、いかに我々一般事業者が使えるようなところ

となるかということだと思う。そのリーサスの見方についても、私も商工会議所の職員にお願いして東山の同業者とその勉強会やったが、その研修会で終わってしまい、その後データを使いこなさきれていないというか、やり方がわからない。一時的には理解したつもりでもそれで終わってしまった。

下呂温泉の観光協会の会長の話を聞いて、何でもデータなのだ、データを見て、そして戦略に変えていくということなのだと思った。

10 担当課 商工労働部観光物産課